

平成29年度 現代行政 I 最終レポート

椎葉村尾向地区のUターンとその背景

東京大学大学院公共政策学教育部
経済政策コース1年 三武 良輔

目次

1. はじめに
2. 椎葉村の基本情報
3. 人口移動について
4. 尾向地区でのヒアリング調査
5. 神楽について
6. 尾向地区のUターンの背景
7. 他の地域の取り組みについて
8. 政策提言

謝辞

参考文献

1. はじめに

椎葉村尾向地区は非常に高いUターン¹率を誇っている。その要因を探るため現地調査を敢行し日本の政策に活かせる視点を整理した。

2. 椎葉村の基本情報

■ 位置

本村は宮崎県の最西北端の
北緯32度27分 東経131度09分、
海拔409mである。

- ひろがり 東西27km
南北33km
面積537.35km²
- 役場所在地 東経131度09分
北緯32度27分

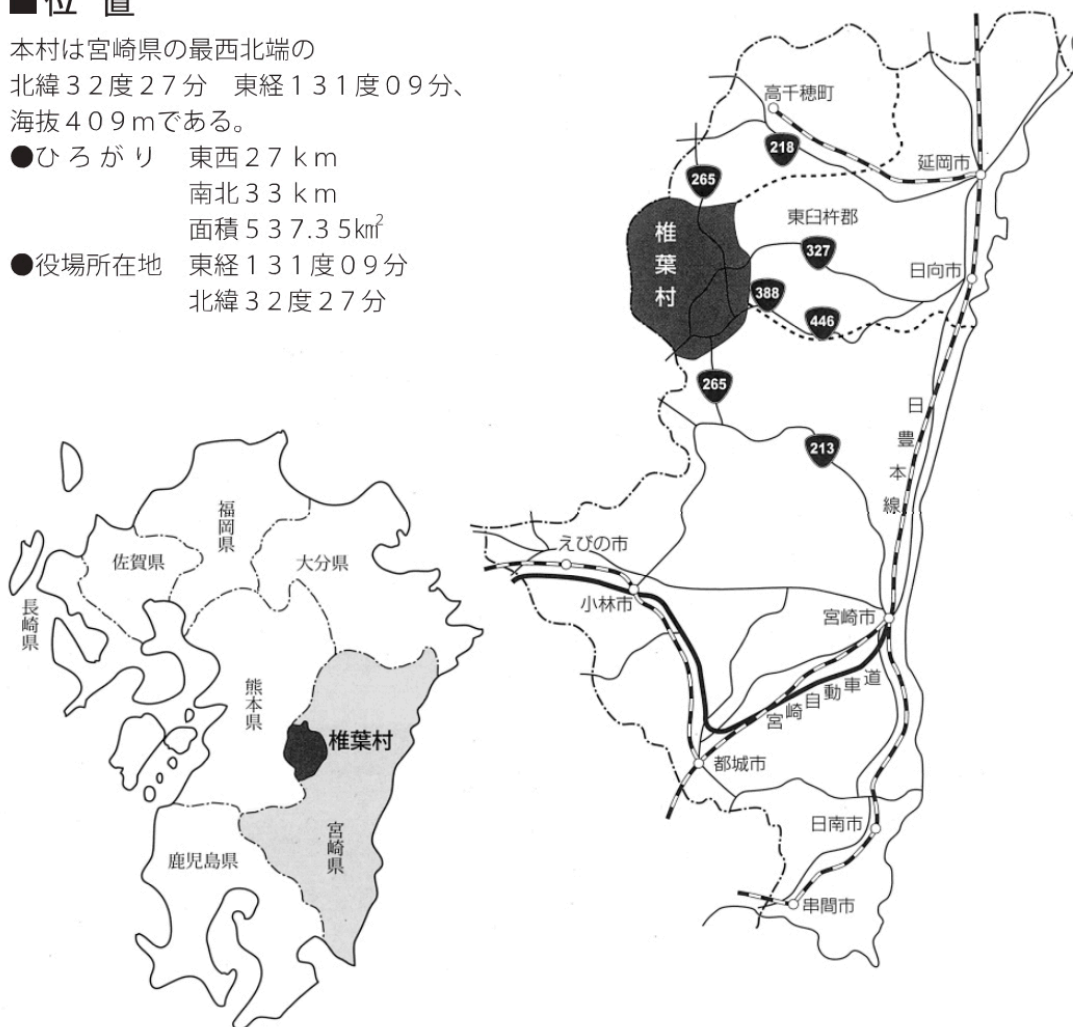


図1 椎葉村の位置

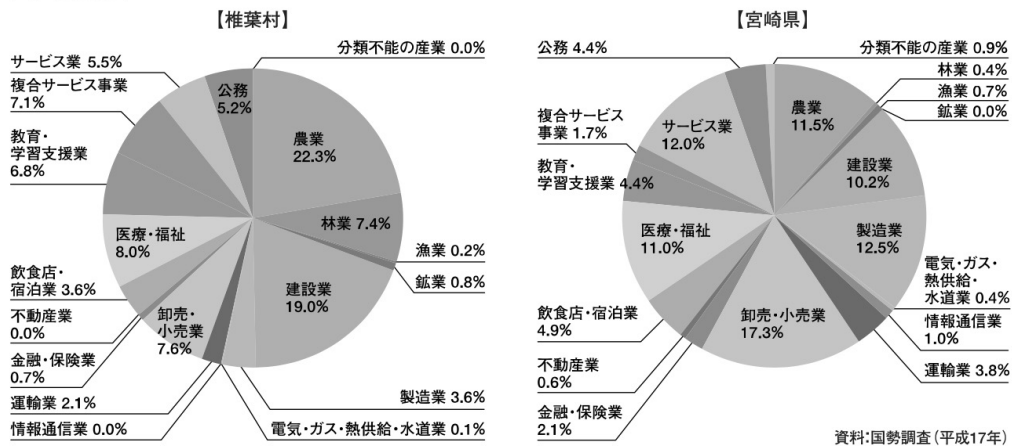
『宮崎県椎葉村 村勢要覧資料編 P1』より抜粋

宮崎県椎葉村は宮崎県と熊本県の県境に位置する村で、日本3大秘境²の1つに数えられている。壇ノ浦の戦いで敗北した平家の落ち武者が入り込んだ村と言われており、神楽や伝統建築などの様々な文化財が数多く残っている。

¹ 地元出身者が地域に戻ってくること。

² 岐阜県白川郷、徳島県祖谷、宮崎県椎葉村

■ 産業構造



■ 産業別就業者人口比の推移

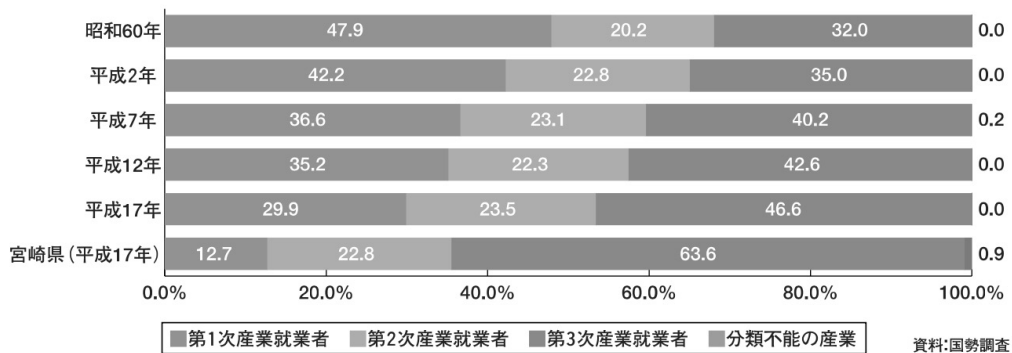


図 2 椎葉村の産業

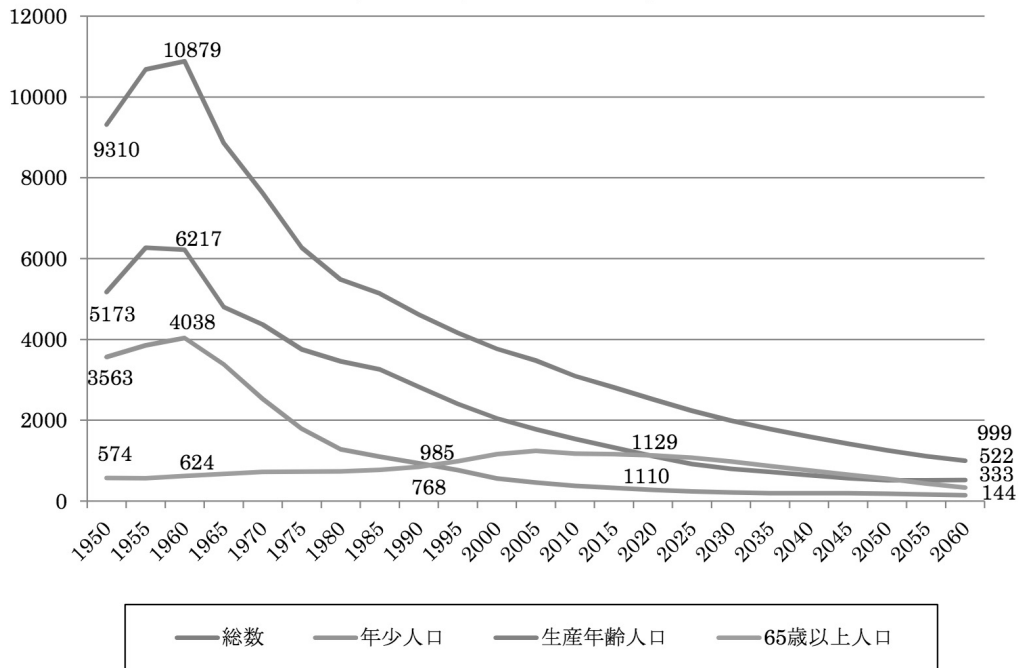
『椎葉村第5次総合計画』より抜粋

椎葉村の産業構造は農業が 22.3 パーセントで最多、次に 19.0 パーセントの建設業が位置する。また産業別就業人口比における昭和 60 年の割合を見ると産業の中心は林業や農業といった一次産業であった。しかし図 3 でわかるように、人口転出と高齢化の影響で第一次産業の担い手は徐々に減っていき、平成 17 年の統計では第三次産業に従事する者の割合が最も高くなっている。

椎葉村の農業は高地という地形を活かしてトマトなどの高原野菜や七草といった付加価値の高い農作物を中心にしている。また林業に当たっては豊富な材木の輸出のみならず、名産であるシイタケ栽培も盛んである。

産業別就業人口比が変化してきたのは、農業や林業を継ぐ若者が地域外で就労してしまうケースが増えたからだと推定される。

年齢3区分別人口の推移



[国立社会保障・人口問題研究所]

図 3 椎葉村の人口

『椎葉村まち・ひと・しごと創生 椎葉村人口ビジョン』より抜粋

椎葉村は人口減少課題に直面しており1960年には1万人を超えていた人口は現在2676人³となっている。今後も人口減少が続いていくと予想される。それに対して椎葉村では対策を打っており、『第5次椎葉村総合計画』⁴においては、「今後、教育・子育て環境、福祉の充実や生活環境の向上などに取り組み、人口の定住化や人口減少の抑制を推進することを前提に、平成33年度における人口は2300人をめざします」と掲げている。

以下ではこの椎葉村の人口減少の背景にある日本全体以の就労と人口移動の関係について文献史料を参考に調査した。

³ 平成30年2月1日現在 椎葉村 HP (<http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/>) より平成30年2月28日に閲覧

⁴ 椎葉村第5次総合計画 ([https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/pdf/20120822-gaiyouban\(1\).pdf](https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/pdf/20120822-gaiyouban(1).pdf)) を参照した。

3. 人口移動について

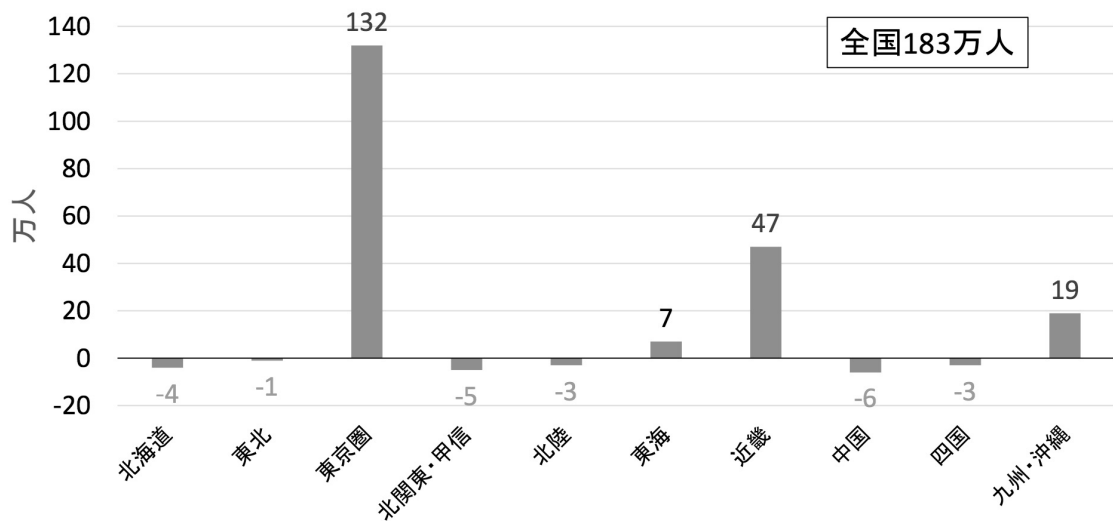


図 4 人口移動の現状

出典『東京一極集中の現状について』

内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局が行った調査『東京一極集中の現状について』によると、「2010年から2016年にかけて、就業者数は全国183万人の増加。そのうち東京圏の増加数は132万人であり、大半を占める。」と語っている通り、就労を目的とした人口移動が東京と近畿を中心に起きている。

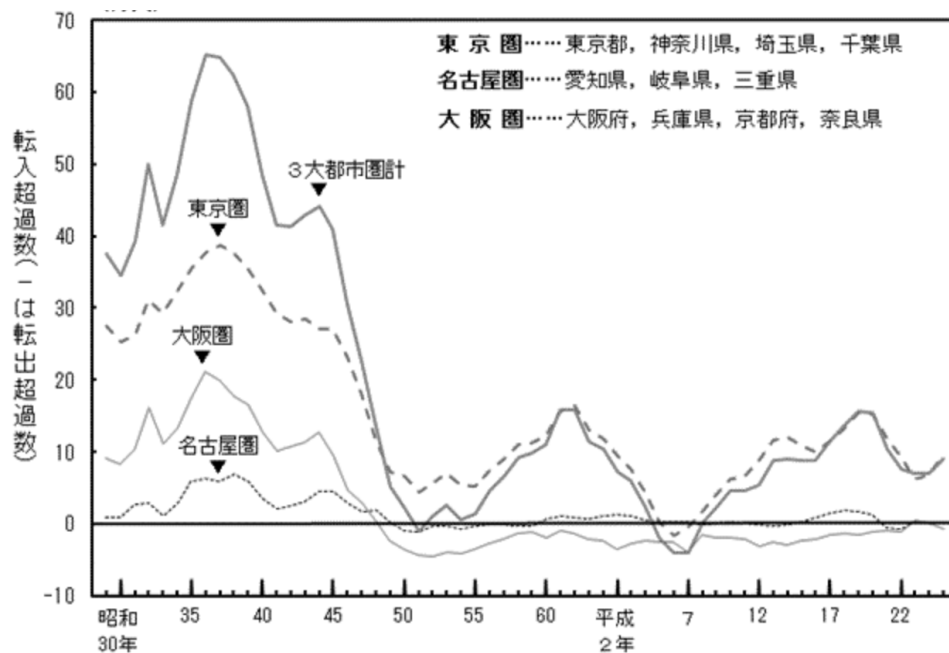


図 5 3大都市圏の転入・転出超過数の推移(昭和29年～平成25年)

出典『住民基本台帳人口移動報告 平成25年(2013年)結果より』

椎葉村の産業就労人口比の変遷の背景にある若者の他地域への流出もこのような東京や近畿への人口集中が関係していると推測できる。

また図5より、この都市への人口移動の傾向はバブル崩壊などの景気が悪い時期を除いて起こっており、今後もよほど景気が悪くならない限り状況は変わらない予想される。

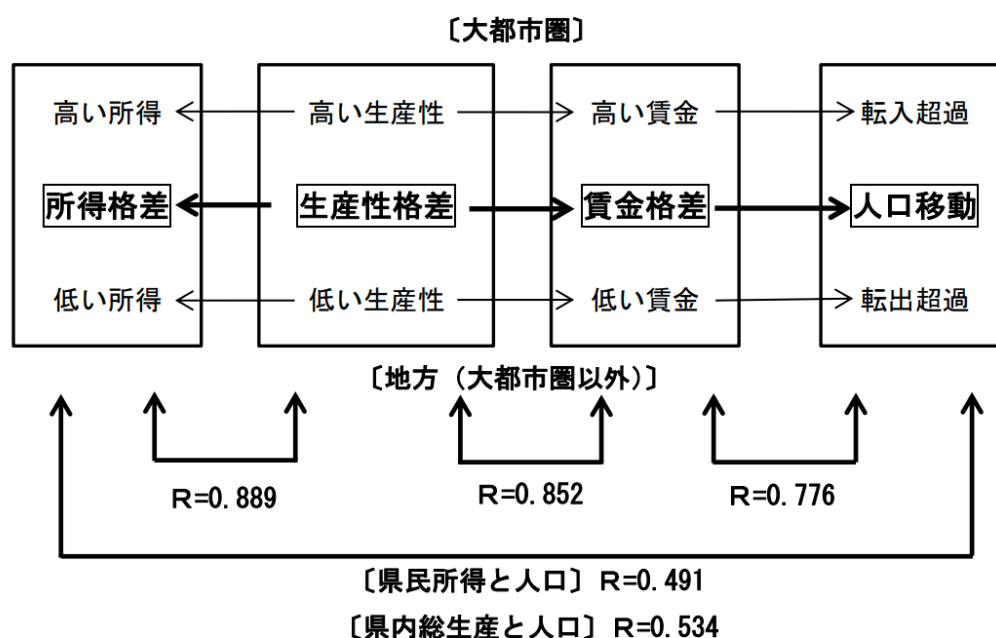


図 6 賃金と人口移動

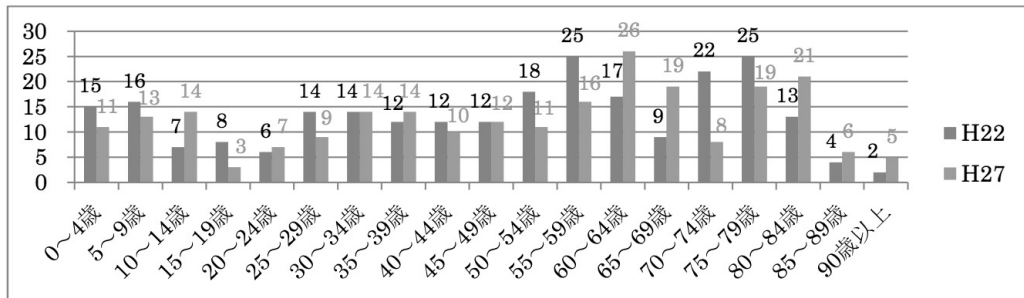
出典『地方からの人口流出の経済的要因と構造－地域経済学の視点による県民経済計算の分析と考察』

また『地方からの人口流出の経済的要因と構造－地域経済学の視点による県民経済計算の分析と考察』の調査によると「人口移動の労働生産性は賃金水準と強い相関関係を有するが、それらの格差が大都市圏への人口移動（＝集中）の要因の一つである。これは見方を変えると労働生産性の格差が地方の人口減少の要因の一つであることも意味します」と結論付けている。地方の人口が減少し都会に人口が集中していくのは、椎葉のみならず他の地域でも同様に起こっていることである。この状況に対して、どのように対応していくのかが問われている。そんな中でも、高いUターン率を誇る椎葉村尾向地区の調査を以下で行った。

4. 尾向地区での調査

■ 尾向地区

【男性】



【女性】

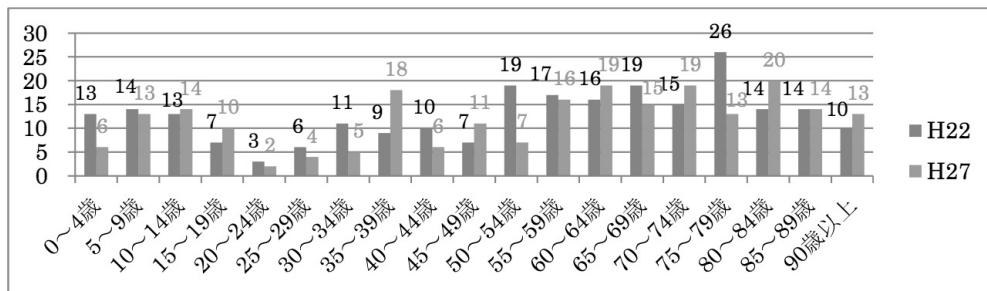


図 7 椎葉村尾向地区 人口ピラミッド

『椎葉村まち・ひと・しごと創生 椎葉村人口ビジョン』より抜粋

上記の尾向地区における人口ピラミッドを見ると、中学生が高校進学⁵で村の外に出てしまう15歳～19歳の軸を除けば、尾向地区は人口移動で語られている高賃金な場所に人々は移動するという理論とは逆に、高校卒業後に地域に戻ってきている。

椎葉村の所得が高いのかということではなく、2013年度の統計⁶によると一人当たり346位となっている。また平成28年賃金構造基本統計調査結果（初任給）の概況によると高卒の初任給は、東京都が17.51万円であるのに対して宮崎県は14.41万円となっている。それにも関わらずUターンが多いのはなぜだろうか。

⁵ 椎葉村には高等学校がないため、進学にあたり村の外に出なければならない。

⁶ 厚生労働省平成28年賃金構造基本統計調査（初任給）の概況

(<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/16/dl/02.pdf>) を参照した。

尾向地区の中学生2人の声を聞くと意外な視点が見えてきた。2人とも口を揃えて大好きな神楽⁷が舞いたいから絶対に尾向に戻りたいと語る。続けて、神楽を舞うのは本当に楽しい上に、その活動を地域の大人たちが暖かく見守ってくれるから続けられると言っていた。2人はこの子供神楽を指導してくれる青年団⁸の”あんちゃん”を心の底から慕っており、将来的には”あんちゃん”の世代よりも良い舞いを披露したいと意気込んでいた。また尾向地区には尾前、日当、日添、追手納の4つの集落があり、他の集落に対して強いライバル心があるため自分の世代がよい舞いをして地域を引っ張って行きたいと言っていた。将来の尾向でのキャリアはすでに決めているようで、それを実現するために進学希望の高校も決めているとのことだった。

続いて、尾向地区の青年団の方々にUターンの理由を聞いてみた。やはり神楽が好きで戻ってきたとの声を多く聞いた。さらには戻ってきて、自分の舞がもらえることは何よりも誇りと語っている青年もいた。神楽を舞うことができるのは基本的には男性のみであるため、Uターンした女性にもヒアリングをした。彼女は尾向を出て千葉県に住んでいたところ、自分が辛い時に都会では支えてくれる地域の人がいなかったことに耐えきれずに尾向に戻ってきたという。尾向には地域全体でお互いを助け合う精神があるとのことであった。

年配の方々に声を聴いたところ、子供をみんなで見守る社会教育が神楽にはあると教えてくれた。尾向は青年団を中心にして地域活動を行っており、その青年たちは子供たちを積極席にサポートし子供たちの憧れになっており、またその青年たちの自由な活動をPTAである親たちが暖かく信頼を持って見守っているようだ。神楽の継承については、他の地区が舞いを継承する家を固定している一方で、尾向は柔軟に対応しているという。もし意固地に神楽の伝統を守ろうとすれば神楽もなくなり、子供も帰ってこなくなるだろうと語っていた。一方で、日当神楽を見に来ていた年配の女性によると神楽はこの最高の娯楽だと言って鑑賞を楽しんでいた。尾向にはこれといった娯楽がなく、そんな環境では神楽ほど楽しいイベントはないようだ。

ヒアリングを通して神楽がUターン並びに地域の核にあることがわかったので、次章では神楽についての調査をまとめた。

⁷ 椎葉村では村の伝統的な舞である神楽が冬に奉納される。また子供たちが神楽を舞う子供神楽が社会教育として行われている。

⁸ 椎葉村尾向地区では青年団と呼ばれる若い青年による組織が生まれ、地域活動の中心を担っている。

5. 神楽について

神楽という地域の伝統文化が重要な位置を占めていることがヒアリングを通してわかってきたため、神楽について簡単に記載する。『椎葉村観光協会 HP』における神楽の解説⁹によると「国指定重要無形民俗文化財 椎葉神楽（しいばかぐら）毎年11月中旬から12月下旬にかけて行われる夜神楽。村内26地区で保存伝承されており、各地区人が総出で神楽を舞っています。神楽は、椎葉の村人にとって一年を締めくくる祭りであり、地元では「冬まつり」「年まつり」とも呼んでいます。神楽を舞う場所は本来民家で、神楽宿と称しています。また、神楽の舞所となる御神屋（みこうや）を設け、正面に神霊を迎える高天原（たかまがはら）を立て、周囲には注連やえりものなどの飾り付けをして神楽を舞います。演目は、33番とよく言われていますが、必ずしも一定したものではなく、20数番から40番近くまでと様々です。神楽の特色としては、この村で今も続けられている狩猟や焼畑耕作の要素を色濃く伝えており、山の生活を表しています。猪や鹿の奉納があったり、アワや大豆などの雑穀を用いる神楽が実に多く見られます。また唱教（しょうぎょう）と呼ばれる唱え言も貴重なもので、神楽や採物の謂われを語ります。この唱教のなかには、平安後期に歌われた歌謡も含まれています。各地区によって舞いも衣装も太鼓のリズムも多種多様で、舞いの一つ一つが昔のままの態様を残していることから平成3年に国の重要無形民俗文化財に指定されました。」となっている。

また尾向地区日当神楽については『みやざき文化財情報¹⁰』によると「【向山日当神楽】 向山日当地区は、椎葉村の西端、熊本県との県境に位置し、九州の屋根を形づくる山岳地帯である。世帯数は30世帯で自給自足の農家が多く、林業・土木業などに従事している。白鳥神社は平家残党の霊を祀っており、元久元年（1204年）の創建と云われている。明治4年に向山神社に改称されている。向山日当神楽は、向山日当公民館にて12月第3土・日曜日に奉納される。今から360年ほど前に、現在の太夫（たゆう）の祖先、蔵座（ぞうざ）七左衛門が、高千穂の土持伊勢守（かみ）から3年3ヶ月かかって神楽33番を伝習したといい伝えられている。夜神楽の行われる公民館は、かつて観音堂のあったところで現在も十一面観音が公民館の中に祀られている。神楽

⁹ 椎葉村観光協会 HP <http://www.shiibakanko.jp/shiru/kagura.html> を参照した。平成30年2月28日閲覧

¹⁰ みやざき文化財情報 HP <http://www.miyazaki-archive.jp/d-museum/mch/kagura/mukaiyamahiate-movie.html> を参照した。平成30年2月28日閲覧

保存会は22名で若い世代も多く、小学生の時から神楽を習っている。神楽せり歌も若い世代に伝承されている。近隣の向山日添、尾前、尾手納（おてのう）地区との神楽の交流もあり、それぞれの夜神楽で一演目奉納している。集落の人に不幸があった場合でも、神楽を中止しないことが多い。」と記載されている。

また『椎葉村史 1960』（p270）村人の娯楽の章では「冬ニ入レバ夜神楽ガアリ 椎葉特有ノ「ゴヤセキ唄」ヲ盛ニウタツテ騒ギ明カス。」と記載されており、いかに神楽が地元の方々の娯楽として親しまれてきたかがわかる。

実際に向山日当神楽を平成29年12月17日に鑑賞した。日当神楽が始まるのは夜の帳が降りる頃。地域内、地域外から続々に人が集まり出し、会場である公民館はあっという間に満員になり、会場は熱気に包まれていた。舞が始まると四方八方から舞い手に声を飛ばす”はやし”が送られる。その内容は声援の時もあれば笑いを取る時もある。来る以前は神事ということで硬いイメージを勝手に思っていたが、地域の人が言うように本当に楽しいイベントである。この舞い手と観客の双方向的なやり取りによって、そこにいる全ての人の心が一つになる。そんな感覚に自分は襲われた。

実はこの神楽に参加する前に、夏は焼畑¹¹や農業、そして冬は猪狩りを手伝わして頂いた。焼畑では火入れを行い、炎と風が巻き上がる山の急斜面を登り降りし、猪狩りでは雪が積もる山に猪を取りに行き裾野まで降ろしてから解体作業をした。この経験を通して、自分、そして自然の命と向き合い、今までは当たり前で頂いていた食物、そしてそれを与えてくれている神への感謝が自然と湧き上がって来た。その結果、神への奉納である神楽の意味も自然と感覚的に理解ができた。

自然と共に暮らし自然と神に感謝し、その想いを神楽を通して神に祈る。そんな現代日本の多くの地域で失われてしまった日本の原点の姿が尾向地区にはまだ残っており、ヒアリングで聞いていた内容が腑に落ちた。

また尾向の尾前地区での先行研究¹²（佐々木 2005 p.107）では「尾前には、神楽の伝承と祭りの執行を中核とする、地域全体での子育てと若者が地域社会にUターンして定着するための仕組みが伝統的に保持されている。」と書かれており、神楽が地域にとって大きな存在であることが示されている。

¹¹ 椎葉村では伝統的に山の斜面を焼いて畑にする焼畑が行われている。

¹² 佐々木昌代『尾前神楽における後継者育成の仕組みと課題 2005 p107

6. 尾向地区のUターンの背景

尾向地区でのUターンの背景を、焼畑、猪狩、神楽などの地域活動への参加と理解、そしてヒアリングによって調べてきた。この結果をまとめると尾向のUターンの背景は以下のように整理できる。

尾向にしかない神楽の伝統を次世代に継承するために工夫
尾向にしかない神楽の伝統を中心にした家庭、学校、社会教育
尾向にしかない神楽の伝統を軸にした地域の縦横の繋がり

↓

その環境下で育つ子供たちの地域愛の醸成

↓

Uターンをしてここで働くことから逆算した子供たちのキャリア形成

↓

高校卒業後にUターン

7. 他の地域での取り組みについて

以上の内容を椎葉村で発表したところ様々なフィードバックをいただきその中で課題も見えてきた。例えば、椎葉村の松尾地区では中学の時に子供神楽はあったものの、現在Uターンで戻ってきている青年OBの方々の全ての集落で神楽は途絶え、現在残っている3集落では後継者がいないという状況とのことであった。途絶えてしまった神楽は伝承できる人がいない上に、現在神楽が残る地区では、受け継ぐにはその地区に住む家のものでないといけないというしきたりとあるということであった。しかしながら去年から神楽を保存するために若者が立ち上がり他の集落の神楽も踊らせてもらえるように交渉し、冬祭りでその第一歩を踏み出したとのことであった。しかしながら、日本神道を信仰する人が多い尾向地区とは違い、松尾地区は仏教を信じる人が多い。さらには既に神主はいなくなってしまうと神楽の意味を理解するのが困難であると言った意見を聞いた。アレンジしながら何とかやっているものの、楽しめるまでにはまだ時間がかかりそうだとおっしゃっていた。

一方で、椎葉村小崎地区では去年の神楽は不幸があったため中止になってしまったとのことであった。しかしながらUターンを増やそうと中年の方々が活動を積極的に行っており、神楽のみならず山法師踊りの継承にも力を注いでいるとのことであった。

また椎葉村の隣の西米良の事例（岡崎 後藤 山崎 2004 p.29）の先行研究¹³によると、「Uターン者増加の背景を調査した結果、約30年前の『家族・親戚』の存在と『伝統文化』に対する意識の高まりが発端となり、にわかには西米良村が活気づいてきた頃に、『村民の交流・活動』と『就職口』に変化が表れたことが明らかになった。またUターン者増加に伴って若者定住住宅を建設し、介護施設をより充実させるなど住環境を整備したことも、Uターン者増加の一因であると考えられる。」と結論付けている。

このような地域が伝統文化を軸に地域にUターンが増える可能性を追い求めていく中で、周りの地域と連携し情報を収集しつつ、行政とも連携し地域活性化に取り組んでくことが重要だと思われる。これまでに調査を踏まえて最後に政策提言を以下で行う。

¹³ 岡崎 京子・後藤 春彦・山崎 義人 『Uターン者増加の過程における転入要因の変遷 ～宮崎県西米良村を事例として～』 2004 p.29

8. 政策提言

日本の多くの地域は後継者不足に悩んでいるのではないだろうか？そんな地域に住み次世代にバトンを引き継ぎたい大人たちに椎葉村尾向地区の事例は大いに参考になると思っている。地域住民の活動として、ここから学び横展開できる内容は、そこにしかない伝統を大切にしつつも時代や状況に合わせて継承する活動、そこにしかない伝統と共にある家庭教育、学校教育、社会教育、そこにしかない伝統を軸にした縦と横の地域の繋がり、の3本の柱であろう。これが実現できれば、仕事優先で都会に行きたい気持ちもあるが、愛着のある地域に戻ってきたいという気持ちもありどっちつかずに揺れ動いている若者も、地域に戻ってきたいから外に出る前に事前に仕事を考えておくと言った行動を自発的に起こしたくなると思われる。また一方で行政側も地域住民が主体となる上記の活動の啓蒙やサポートなどを行っていくことが求められる。

謝辞

今回の調査のきっかけとなった平成29年度フィールドスタディ型政策協働プログラムにおいてお忙しい中多くの指導の時間を割いてくださった活動主担当の小国喜弘教授をはじめとしたFS先行委員会の阿部祐子教授、五百旗頭薫教授、宇野重規教授、玄田有史教授、また幾谷様を始めとした学生支援課のみなさまに深謝いたします。そして東京大学公共政策大学院の事例研究『現代行政Ⅰ』の授業においては増田寛也客員教授に調査や研究にあたり多くの知識や示唆を頂きました。本当にありがとうございました。

椎葉村における調査は7月18日から21日、8月10日から25日、12月12日から17日、2月15日から18日の計4回、約1ヶ月間でした。このフィールドワークの手配からサポートまで全面的にご協力頂いた椎葉村役場の椎葉豊様、地域起こし協力隊の村上健太様、並びに地域振興課、そして全ての役場職員の方々に深く御礼を申し上げます。またよそ者にも関わらず地域活動への参加を快く受け入れてくださり家族のように迎え入れてくださった尾向地区、小崎地区、松尾地区（50音順）のみなさまには感謝の念にたえません。さらには、他の地区においても個別でお世話になった多くの椎葉村の方々に厚く御礼を申し上げます。

調査を9ヶ月共に行った藤田麻莉子、そして意見交換を積極的に行った木下郁英をはじめとしたフィールドスタディ型政策協働プログラムに参加し刺激があった仲間たち、また現代行政Ⅰの授業で示唆に富む意見をくださったゼミ生の皆さまには大変お世話になりました。ここに感謝いたします。

この活動のサポートとして地域との関わり方のアドバイスや他の地域の事例の紹介をしてくださったETIC.の伊藤淳司様、瀬沼希望様、またUターン研究に関する知見を教えて頂いた調査労働政策研究・研修機構の高見具広様に心から感謝します。

参考図版

- 図1 椎葉村の位置 『宮崎県椎葉村 村勢要覧資料編 P1』より抜粋
- 図2 椎葉村の産業 『椎葉村第5次総合計画』より抜粋
- 図3 椎葉村の人口 『椎葉村まち・ひと・しごと創生 椎葉村人口ビジョン』より抜粋
- 図4 人口移動の現状 『東京一極集中の現状について』より抜粋
- 図5 3大都市圏の転入・転出超過数の推移(昭和29年～平成25年) 出典『住民基本台帳人口移動報告 平成25年(2013年)結果より』より抜粋
- 図6 賃金と人口移動 『地方からの人口流出の経済的要因と構造 ―地域経済学の視点による県民経済計算の分析と考察』より抜粋
- 図7 椎葉村尾向地区人口ピラミッド『椎葉村まち・ひと・しごと創生 椎葉村人口ビジョン』より抜粋

参考文献

- 椎葉村 HP (<http://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/>) より平成30年2月28日に閲覧
- 椎葉村第5次総合計画 ([https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/pdf/20120822-gaiyouban\(1\).pdf](https://www.vill.shiiba.miyazaki.jp/promote/pdf/20120822-gaiyouban(1).pdf)) より平成30年2月28日に閲覧
- 厚生労働省 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/16/d1/02.pdf>)
平成30年2月27日閲覧
- 椎葉村観光協会 HP (<http://www.shiibakanko.jp/shiru/kagura.html>)平成30年2月28日閲覧
- みやざき文化財情報 HP <http://www.miyazaki-archive.jp/d-museum/mch/kagura/mukaiyamahiate-movie.html> 平成30年2月28日閲覧
- 石川恒太郎編『椎葉村史 1960』椎葉村村役場(p270)
- 佐々木昌代『尾前神楽における後継者育成の仕組みと課題 2005 p107
- 岡崎京子・後藤春彦・山崎義人『U ターン者増加の過程における転入要因の変遷 ～宮崎県西米良村を事例として～』 2004 日本都市計画学会都市計画論文集 No. 39—3 p. 29